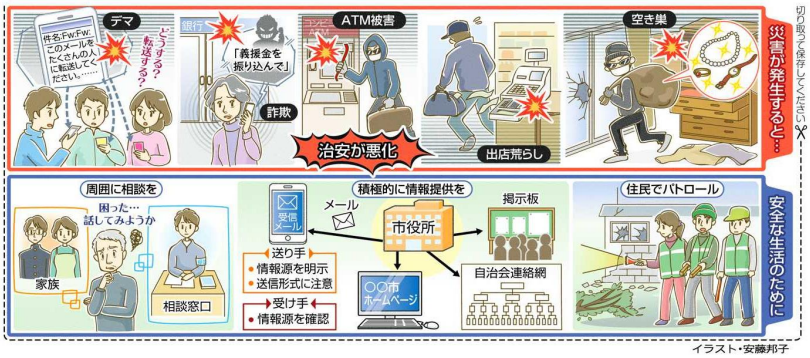
備える 3.11から 災前の策　第123回 想定シリーズ⑳ 治安

混乱狙う空き巣、詐欺

名古屋大減災連携研究センターの協力の下、南海トラフ巨大地震が発生した場合を想定するシリーズ。最終回は「治安」がテーマ。東日本大震災の被災地では、大きな混乱が起きることはなく、世界中から日本人の規範意識を称賛する声も聞かれた。だが、実は長期の留守宅を狙った窃盗や、義援金名目での詐欺などの犯罪も少なからず起きていた。治安維持のためには、地域の絆がカギになるようだ。

（戸川祐馬）



イラスト・安藤邦子

転送メール デマ拡大も

東日本大震災の後、住民が始めた防犯パトロール。地域の力も治安維持に有効だ＝昨年3月、福島県南相馬市で

一月のある日。南海トラフ巨大地震が発生し、太平洋岸の愛知県南部の町は、津波で多くの家屋が壊れた。住民の多くは、高台の避難所で生活した。

一週間後。小学校の体育館で避難生活を送る備多奏さん(ニ)は、一階が浸水した自宅を見に行った。

備多さんが二階に上がると、見知らぬ男がベッドで寝ていた。「何をやってんだ」と一喝すると、男は「見つかっちゃったか」と言いながら出て行った。

部屋を見渡すと、掛け時計がない。新築祝いにもらった音楽が流れるお気に入りだった。不安になってタンスを開けると、妻のネックレスもなくなっていた。

玄関のドアは津波で外れてなくなり、ブルーシートを張っておいただけだが、「こんな非常事態に盗むなんて」。大切なものを失った悲しみ、そして怒りがこみ上げてきた。

失意のまま避難所に戻って二日後。目を覚ますと、携帯電話に「ｍｓ：注意！」との件名の一通のメール。「なんだろう…」と思いながら開くと―。

石油タンクの爆発で有害物質が飛んで雲に付着したみたいで、今日雨が降ると有害物質が降ってきます。体を雨にぬらさないように注意してください！ パニックになるから政府は知らせないようです。転送して友達に知らせてください

地震後、地元の石油コンビナートで火災が発生したことは知っている。「爆発なんかしたっけ。有害物質って何だろう？」首をかしげながら外に出ると雨が降っていた。「ねえ、この雨ってやばいんでしょ」「知ってる。メール来たから、友達に回しておいた。」女性たちは長袖を着て、傘を差していた。

半信半疑だった備多さんだったが、政府が隠していないと」との思いが強くなり、携帯電話を再び手にしたり、メールの「転送」ボタンを押し、一斉に送った。十分後、そのうちの一人からデマだと指摘する電話があった。「良かれと思って送ったのに。一体、何を信じたらいいのか」。備多さんは届いたメールを見ながらぼうぜんとした。

◇

地震から二カ月後、バートの仕事を終えて帰宅した長野県の備地音寧さん(ニ)方の固定電話が鳴った。

「愛知県南部では、たくさんの人が避難所生活を強いられています。義援金へのご協力をお願いします」。受話器の向こうの男性の話を聞くうち、備地さんの頭には、かつて旅したあの町の海岸線の美しさや、住民の温かいおもてなしが浮かんできた。「義援金なら協力できるかも」

一方で、ニセ電話詐欺かも」との不安もよぎり、「自分で日赤に義援金を送ります」と伝えた。すると男性は「われわれのようなボランティアに任せてください」と言う。何度も言われるうちに男性の言葉に納得し、「隣の県の人が困っているんだから」「困ったときはお互いさまよね」と考えるようになった。送金先の口座をメモした紙を手に信用金庫に向かった。

「すみません、預金すべてを義援金として送りたいんです」。窓口でそう言うと、客家に話しましたか？と待ってください。そのことは知っている。「爆発」と、女性職員が異変を察知してこう答えた。「ちょっ　しょう」

「すみません、預金すべてを義援金として送りたいんです」。窓口でそう言うと、客家に話しましたか？と待ってください。そのことは知っている。「爆発」と、女性職員が異変を察知してこう答えた。「ちょっ　しょう」

愛知県警災害対策課 星野厚志課長

災害時、愛知県警は大震災警備基本計画に基づき活動します。初期段階では、警備体制の早期確立や被害情報の収集、避難誘導、行方不明者情報の収集、救出救助と捜索、緊急交通路の確保に努めます。二十四時間以内に県外から到着する応援部隊の力を借りて、災害時の生存の目安とされる七十二時間以内での人命救助に全力を挙げます。

犯罪の抑止と捜査は緩めることなく続けますが、結果的に初期段階では人命救助の比重が高くなるでしょう。

東日本大震災が発生した二〇一一年、東北の被災三県では空き巣をはじめとする侵入盗が前年に比べて増えました。地震や津波が発生したら、安全な場所に逃げることが何よりも大切です。災害発生直後に貴重品などを持って逃げることは難しい思いますので、安全を確保した後で一時的に自宅に戻ることができたら、大切なものを持ち出すなどして被害に遭わないようにしてください。

警察だけの力には限りがありますので、パトロールなどという形で住民の皆さんの力もお借りして、災害時の治安確保に万全を期していきます。

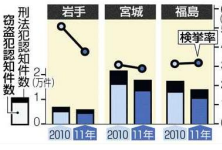
安全確保後 貴重品回収を

福島 ATM盗増える
住民立ち入り規制が背景

警察庁によると、東日本大震災が起きた二〇一一年、刑法犯の認知件数をの一県とも二〇年に比べて減った。ただ、福島では、空き巣や出店荒らし、コンビニなどの現金自動預払機（ATM）からの現金の窃盗が増えた。福島第一原発事故で周辺地域の立ち入りが規制され、住民の避難が長期間続いたことが背景にあるとされる。

警察などは震災後、東北三県のコンビニのATMに残っていた三十億円を回収したが、盗難被害も六十一件、六億八千四百万円に上った。

一方、自治体職員やNPOなどをかたって震災義援金名目で現金を詐欺取る詐欺も、一一年だけで全国で九十二件発生し、被害金額は七千万円に上った。警察は、うち六十二件を一一年内に摘発した。



教えて、センセイ！

田代喬准教授（たしろ たかし）
（水防災学）

地域ぐるみで防犯活動
名古屋大減災連携研究センター協力企画

被災後に住人が避難して無人となった家では、空き巣などが起きやすくなります。東日本大震災のときも、いわゆる「火事場泥棒」がありました。まずは、自らが出来心から犯罪者とならないよう、食料などを備蓄しておきましょう。

災害直後を除けば、警察や行政によって防犯活動が展開されます。避難生活が落ち着いた後は、公的なパトロールに加えて、地域コミュニティーで協力して見回りなどをすることも効果的です。こうした活動を日ごろから実践し、継続すれば、地域の現状や特性を理解することができ、地域の防災力を高め、災害時にも役立つのです。

ただ、住民による防犯活動が過熱・過剰化する事態は、心身ともに負担が大きくなるので無理のない範囲で取り組んでください。

一方、災害後のデマで有名なのは、一九二三年の関東大震災のときの事件でしょう。混乱の中で「朝鮮人が暴動を起こす」といったデマが流布され、多数の朝鮮人らが虐殺されました。ここまで極端なケースはなくても、災害後にデマがまん延する原因には「混乱、無知、情報不足」と「悪意、差別的意識」があると考えられます。情報不足によるデマを防ぐため、災害時に情報の送り手となる行政は、被災者の状況に配慮しながら積極的に情報提供する必要があります。

正確な情報を入手できないことが、デマ拡散の遠因になり得ると認識しておいてください。また、安易にデマを拡散することは、自身の品性をおとしめる行為と自覚しましょう。情報を受けた際には家族や周りの人と話し合って冷静に対応し、情報を伝える時は情報源を明確にすることは日ごろから心掛けてください。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています